博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　　野元　裕樹　印

学位申請者　Patricio Varela Almiron（以下、パトリシオとする）

論　文　名　A Study on Papiamentu Morphosyntax
（パピアメント語の形態統語論に関する一考察）

結論

パトリシオ氏から提出された学位請求論文 A Study on Papiamentu Morphosyntax （パピアメント語の形態統語論に関する一考察）について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は野元を主査に、副査として本学アジア・アフリカ言語文化研究所の塩原朝子教授、京都大学の千田俊太郎教授、本学の内原洋人准教授、主任指導教員である風間伸次郎教授を加えた５名で構成された。

論文の概要

本論文はパピアメント語の形態統語論について、体系的かつ網羅的に記述した論文である。この言語はカリブ海の 3 つの島（ABC 諸島）で話されているクレオール言語であり、こ本論文執筆時点では簡単な文法スケッチと規範的な文法書しか刊行されていなかった。本論文は母語話者への聞き取り調査とコーパスから得られたデータによって、丁寧にこの言語の文法の全体像を明らかにした論考である。

本論文の構成は以下のようになっている。

第 1 章では、パピアメント語とその話者に関する一般的な情報を提示している。まず話者の数とその地理的な位置について述べたのち、先行研究のうちもっとも重要なものを 2 点まとめている。具体的には、1) パピアメント語の文法全体の特徴を簡潔に説明した Kouwenberg and Murray (1994) と、2) Departamento di Enseñansa Aruba (2010), Luidens et al. (2015), and Velásquez et al. (2016) という 3 冊からなるアルバ島の研究者によって書かれたパピアメント語の 1 つの文法書である。3 冊からなる文法書は Kouwenberg and Murray (1994)よりも広範なものであるが、文法に対する規範的なアプローチをとっている点に問題がある。さらに、筆者が分析に用いたデータを紹介するとともに、本論文を通して使用している慣習的な転写方法について説明している。

第 2 章では、形態統語的な特徴に基づき、各語類の大まかな定義を行っている。まずパ

ピアメント語ではある語は名詞として、あるいは形容詞として、副詞として用いられることについて述べている。これらの 3 つの語類の間にはかなりの流動性があり、その違いはもっぱら構文上の位置によって決定されている。一方、動詞は構文上の位置と音韻構造によって明確に他の語類と区別される。代名詞は人称代名詞、指示代名詞、疑問代名詞、関係代名詞、不定代名詞に下位分類することが可能である。疑問代名詞に補文標識 ku とコピュラ ta を組み合わせると、不定代名詞と同等の意味を表すことができる。指示冠詞 esun「そのもの」、es(u)nan「それらのもの」の特徴についても説明している。前置詞をその意味によって、複合前置詞はさらにそれを形成する要素によって分類を行っている。さらに、動詞句内に現れる小詞と、接続詞、間投詞を紹介している。

第 3 章では、パピアメント語の形態論を屈折と派生に分けて記述している。動詞に見られる屈折の一種である音韻変化について言及し、次に分詞や属格を形成する接辞を紹介している。これらの接辞の出現はその動詞の語源がスペイン語・ポルトガル語由来であるか否かによって大きく左右される。接語に関しては、パピアメント語では文法語が接語化する傾向があることを指摘し、その例を丁寧に示している。そのほか、a=のような生産性の低い接語が一見無関係な複数の語にまたがって出現することについても説明を行っている。

第 4 章では、句と節の特徴、およびその構成要素を示している。このうち、名詞句と動詞句には数多くの要素が含まれる。名詞句は、名詞核（noun core; NC）とその修飾語に分けることができる。第 3 章で定義した複合語と擬似複合語の中には、1 つの NC として機能するものがある。名詞句は、その定性によって、異なる修飾語を持ったり、まったく修飾語を持たなかったりするという特徴がある。NC が表すものは、それが複数として解釈されるか単数として解釈されるかによってその修飾語の選択が左右される。動詞句には、動詞核と複数の修飾語が含まれる。動詞核に含まれる動詞によって、斜格項が義務的に現れることがある。これらの要素は義務的周辺項 (obligatory peripheral argument; OPA) として機能する。OPA は前置詞句または補文のいずれかである。節は通常、主語と動詞を持ち、動詞は自動詞か他動詞のどちらかである。無標の節のほかに、明白な主語を持たない非人称節がある。命令節は明白な主語を持たない傾向にあり、動詞や周囲の要素によって、動詞が命令形になることがある。補文節と関係節は、どちらも従属節の一種である。補文節は、その導入に用いられる補文標識によって分けられる。関係節は必ずしも補文標識や関係代名詞を必要としない。最後に、複数の動詞を含む節に関する記述を行っている。複数の動詞を含む節は軽動詞節と連続動詞節 (serial verb clause; SVC) を含む。軽動詞節の最初の動詞は後続する動詞を修飾するものであるが、その動詞がもたらす意味は曖昧であることがある。一方、SVC には、複数の動詞句が接続詞なしに次々と現れる対称型 SVC と、両方の動詞が 1 つの動詞句内にあるものに分けられる。後者は動作とその結果を表す結果型 SVC と、特定の方向への何らかの動きを表す方向型 SVC に細分化できる。

第 5 章では、文法的カテゴリについて記述している。具体的には、テンス・アスペクト・モダリティ (TAM)と、ヴォイス、否定、疑問、焦点化といった文法カテゴリであ

る。TAM はパピアメント語では小詞や補助動詞の複雑な体系によって表される。これらの要素の組み合わせと従属節におけるそれぞれの要素の示す特殊な意味合いがパピアメント語文法の最も複雑な側面の 1 つとなっている。使役態に関しては、用いられる補助動詞の違いおよび、補文標識の有無による意味の違いを説明している。さらに、疑問代名詞と疑問副詞の特徴を詳しく説明し、パピアメント語の付加疑問文の種類をまとめている。

第 6 章では、パピアメント語の全体的な特徴を述べるとともに、他のクレオール及びパピアメント語に影響を与えた他の言語に見られる類型的な特徴との対照を行っている。これらの言語には、パピアメント語の基層言語（のちにパピアメント語話者となった多数の人が本来話していた言語）、上層言語（パピアメント語の語彙の大部分を提供した言語）、パピアメント語話者の多くが住む ABC 諸島において威信のある言語であるオランダ語が含まれる。パピアメント語は、他のクレオールと多くの特徴を共有している。しかし、パピアメント語の SVC は他のクレオールに見られるようなパターンを許さない。パピアメント語の基層の 1 つであると考えられるフォン語 (Fongbe) と対照することによって、両言語に見られる SVC がかなり異なっていることを明らかにした。ABC 諸島に住むパピアメント語話者は、パピアメント語の上層言語の 1 つであるスペイン語と、オランダ語の影響を大きく受けている。前者は慣用表現に多く用いられ、後者はコード切り替えによく用いられる。パピアメント語にはオランダ語の分離動詞の翻訳借用がいくつかあり、英語の句動詞のような構文が生じている。

第 7 章では上記の文法記述における本論文独自の発見をまとめるとともに、今後の課題を示している。

審査の概要及び評価

上記のようにパトリシオ氏の博士論文は、新しい知見を多く示しつつ、パピアメント語の形態統語論の詳細を体系的・網羅的に明らかにすることに成功している。

本論文の内容に関して、各審査委員からさまざまな評価がなされた。各委員より特に高く評価されたのは、以下の点である。

・一次資料を収集し、なおかつ独自の分析を行っている点が高く評価できる。
・参照文法と呼ぶに値するものを作り上げている。細かい要素まで網羅的に扱っている点がよい。
・かなりの量のテキストの書き起こしがある点も評価できる。
・クレオール言語としての性格を過大視した議論を避け、構造主義的な諸形式の分布に基づいた記述を徹底して行っている点がよい。

もちろん本論文にも改善すべき点が残されている。最終試験において、審査委員からいくつかの質問、要望が出された。その指摘のうち、重要な点としては以下のようなものをあげることができる。

・副詞という品詞にはかなり雑多なものが含まれているが、そのことについて先に断っておく必要がある。その上で特徴的な振る舞いをするものを別立てで記述するのがよい。
・「義務的周辺項」に関連する記述や定義が不十分である。
・もう少し類型論的な研究を参照し、類型論的な考察を行ってもよかったのではないか。
・イベリア諸語をはじめとするロマンス諸語の記述の枠組みや諸形式の通時的起源にとらわれている面があるのではないか。一方でイベリア諸語、特にスペイン語との類似点／相違点についてもう少し触れてもよかったのではないか。
・文法的な諸現象についてのメタ的な記述が不足している。用語・術語そのものについての考察をより丁寧に行ってもらいたい。

各委員からのこれらの指摘も、本論文の価値を高く評価した上で今後のさらなる研究の進展を期待したものであり、建設的な意見として提言を行っているものといえる。

最終試験における質疑においても、申請者の応答は的確で、委員たちとの間で学問的に興味深い議論が行われた。その過程から、申請者が指摘された問題点をよく自覚し、今後それらを解明していくのに十分な学識と強い意欲を持っていることが確認された。パピアメント語の記述研究、ならびに他のクレオール諸言語との対照研究や類型論的な観点からの研究に関して、申請者の今後の活躍が十分に期待できる。

審査委員会は、学位請求論文の内容、ならびに最終試験（公開審査）の結果より総合的に検討した結果、全員一致で申請者パトリシオ氏の学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。